児童版 ECR-RS の青年期への適用

―収束的妥当性と弁別的妥当性の検討―

○松尾和弥・大浦真一（甲南大学大学院人文科学研究科）・
島　義弘・稲垣　勉（鹿児島大学教育学系）・福井義一（甲南大学）

キーワード：内的作業モデル，被虐待経験，抑うつ，対人ライフイベント

目　的

心身の健康を規定する要因の一つに，内的作業モデル（Internal Working Models; IWM）が挙げられる（Bowlby, 1973）。一般他者に対する IWM は，養育者や身近な大人などの複数の愛着対象との経験が統合される形で構成される，自己と他者に関する信念であり，児童期前後に確立されると言われている（Kerns, 2016）。しかし，いったん形成された IWM も，その後の経験によって変化しうることから，一般他者に対する IWM の変遷を検討するには，児童期から成人期までの IWM を何らかの共通した方法で測定する必要がある。

本研究では，中尾他（2016）による児童版 ECR-RS に着目した。本尺度は「児童版」と銘打ってはいるが，児童から成人までを対象に測定可能であるとされている（中尾, 2018）。ただし，児童を対象とした信頼性と妥当性の検討はなされているが，成人への適用例は筆者の知る限り見当たらない。

そこで，本研究では大学生を対象に，児童版 ECR-RS と IWM を測定する他の成人用の尺度との関連を検討することで収束的妥当性を，IWM との関連が予測される他の構成概念（被虐待経験，対人ライフイベント，抑うつ）との関連を検討することで弁別的妥当性を検討することを目的とした。

方　法

参加者：大学生 38 名（男性 14 名，女性 23 名，不明 1 名），平均年齢 21.54 歳（*SD*=7.06）の同意を得たうえで調査を実施した。

尺度構成：IWM を児童版 ECR-RS（中尾他, 2016, 中尾, 2018），ECR-GO（Brennan et al., 1998; 中尾他, 2004），ECR-RS-GO（Fraley et al., 2011; 古村他, 2016）で測定し，それぞれの不安・回避の得点を得た。被虐待経験を CATS（Sanders et al, 1991, 1995; 田辺, 1996, 2005）で測定し，被虐待経験得点を得た。対人ライフイベントを対人・達成領域別ライフイベント尺度（高比良, 1998）の対人領域の項目群で測定し，対人ネガティブライフイベント（対人 NLE）・対人ポジティブライフイベント（対人 PLE）得点を得た。精神的健康を CES-D（Radloff, 1977; 島他, 1985）で測定し，抑うつ得点を得た。

結　果

IWM を測定する 3 つの尺度で測定した関係不安・回避得点と被虐待経験，対人ライフイベント，抑うつの関連を検討するために相関分析を行った。その結果を Table 1 に示した。児童版 ECR-RS の不安・回避は，ECR-GO や ECR-RS-GO いずれの不安・回避とも高い有意な正の相関をそれぞれ示した。さらに，いずれの尺度でも，不安は対人 NLE や抑うつと中程度の有意な正の相関を示すのに対し，回避は被虐待経験や対人 NLE，抑うつとは無相関，対人 PLE とは中程度の有意な負の相関を示した。一方で，3 つの IWM の尺度のうち，児童版 ECR-RS の不安のみが被虐待経験と，また，児童版 ECR-RS と ECR-GO の不安のみが対人 PLE と有意な正の相関を示していた。

考　察

児童版 ECR-RS で測定された不安・回避は，ECR-GO および ECR-RS-GO で測定された不安・回避と高い正の相関をそれぞれ示していた。これは，児童版 ECR-RS が，ECR-GO および ECR-RS-GO と同様の構成概念を測定していることを担保していると考えられる。さらに，児童版 ECR-RS は ECR-GO や ECR-RS-GO と同様に，他の構成概念（被虐待経験，対人ライフイベント，抑うつ）とは，有意ではないものもあるとはいえ，全て予測と等しい方向の相関を示していた。不安が対人 NLE や抑うつといった不適応的な変数と正の相関を示すのに対して，回避が対人 PLE のような適応的な変数と負の相関を示すことは，先行研究の結果（松尾他, 2016）と一致している。このことから，児童版 ECR-RS は，他の構成概念との関連においても，成人用の IWM 尺度と同様の結果が得られたといえる。よって，児童版 ECR-RS は，大学生を対象とした場合においても，十分な収束的妥当性と弁別的妥当性を備えていると考えられる。なお，IWM を測定する尺度によって他の構成概念との相関関係に一部相違がみられているが，相関係数の差は大きくない。今後，調査対象者を増やすなどして，引き続き検討すべきであろう。

本研究は，平成 30 年度科学研究費補助金基盤（C）「愛着と共感性の意識的・無意識的側面の関連とそれらが社会適応に及ぼす影響」（代表：福井義一）の助成を受けて行われた。本発表内容に利益相反はない。

（MATSUO Kazuya, OURA Shin-ichi, SHIMA Yoshihiro, INAGAKI Tsutomu, FUKUI Yoshikazu）

Table 1. 各尺度間の相関

		児童版ECR-RS		ECR-GO		ECR-RS-GO		被虐待経験	抑うつ	対人ライフイベント	
		不安	回避	不安	回避	不安	回避			対人NLE	対人PLE
児童版 ECR-RS	不安	－						.318 †	.601 **	.504 **	.288 †
	回避	.063	－					－.041	.185	－.055	－.395 *
ECR-GO	不安	.809 **	－.081	－				.262	.573 **	.456 **	.279 †
	回避	－.020	.865 **	－.178	－			.061	.018	－.073	－.433 **
ECR-RS-GO	不安	.703 **	.118	.772 **	.094	－		.269	.435 **	.356 *	.150
	回避	－.178	.753 **	－.302 †	.737 **	－.095	－	－.093	－.086	－.214	－.584 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$